

ドナウ川 セルビア

世界川物語

2

ゆつたりとしたサバ川の流
れを受け入れ、ドナウ川はさ
らに水量を増してかなたまで
続く。ローマ帝国の時代から
川の合流点を見下ろす丘の上
に立つベオグラード要塞から
見下ろすと、ここに暮らす人
々と川の大切な関わりが見え
てくる。

ドイツに源を発し、黒海に
注ぐ欧州第2の川ドナウ。か
つてここを往来した貨物船は
観光クルーズ船に、川沿いの
倉庫は現代的なカフェやレス
トランに姿を変えた。しかし、
ドナウ川は今もセルビアの人
々の暮らしの間にある。

99年3月24日

カップルや家族が夜遅くま
で語り合う川べりのレストラ
ンの売り物の一つは新鮮な魚

料理。食卓に供する直前に地元
の川漁師らが近くの川で取っ
てきたものだ。

「川の恵みは市民になくては
ならないものだ。その川の水や
ここにすむ生き物に目に見えな
い汚染が広がっているかもしれ
ない。でも、誰もそれを分かっ
ていない」。化学が専門のベ
オグラード大准教授、ウラジー
ミル・ベスコスキー(38)が、流
れを見詰めながらつぶやく。

「ベオグラードで生まれ、幼
いころから川で生き物を追っ
て遊んだ。今は比喩ものになら
ないほどきれいで、たくさん
の生き物がいた」と言うベスコ
スキーは、1999年のあの日の
ことを今も鮮明に覚えている。

3月24日、遠くから響く飛行
機の音、さく裂する爆弾の音と
衝撃。立ち上る黒煙。ベスコ

スキーは大学近くのアパートの
一室で、おのきながら見詰
めていた。爆撃された製油所
は同日にもわたって燃え続け、
黒煙が空を埋めた。

民族対立に端を発したコン
ボ紛争で北大西洋条約機構(N
ATO)はユーゴスラビアを
空爆、セルビアの工場や発電
所、石油精製施設などは徹底
的に破壊された。約3カ月続
いた爆撃の後、ドナウには「有
毒の遺産」と呼ばれる、目に
見えない汚染が残された。発
電所や工場からはポリ塩化ビ
フェニール(PCB)などの
有害化学物質が大量に川に流
れ込んだのだ。

ホットスポット

空爆直後、国連は化学物質
汚染を確認するため、調査チ
ームを派遣する。汚染の深刻
さゆえに「ホットスポット」
と称された場所の多くはドナ
ウ川に面していた。

高濃度PCBを含む変圧器
などは撤去、処理された。し

PCB対策 日本も協力

かし、工場廃水などに含まれる
有害物質に紛争の遺産が加わ
り、汚染は今も続いている。

後にベオグラード大学の研究
チームは、首都周辺の魚に高濃
度のPCBなどが蓄積している
ことを突き止めた。しかしサン
プルが少なく、実態は分からな
いままだった。

2012年10月、ベオグラ
ード空港に降り立った2人の日本
人研究者が、ベスコスキーと固
い握手を交わした。

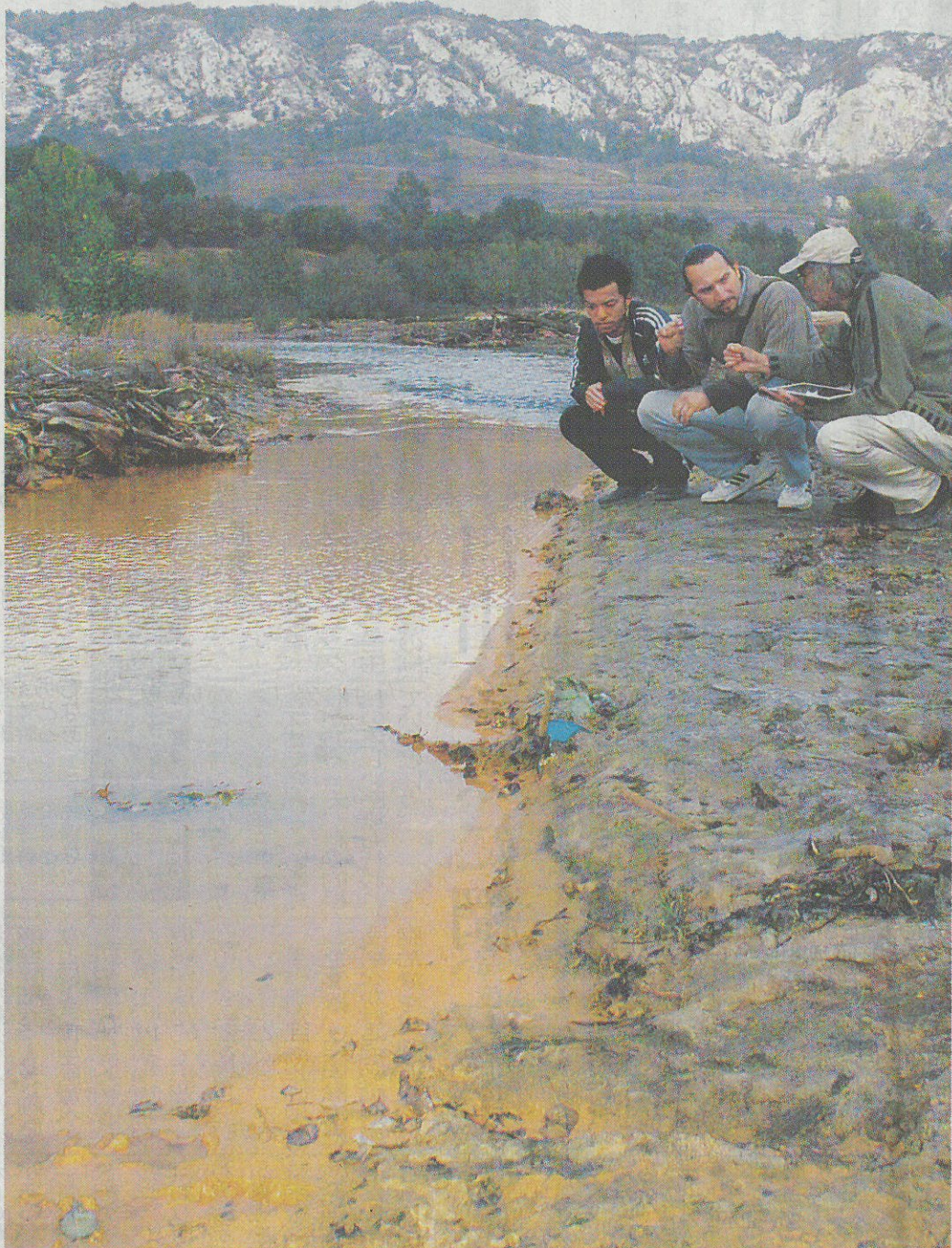
大阪大特任教授の中野武(63)
は、PCB製造企業が立地し、
海洋や底泥の深刻な汚染が問題
になった地域で生まれ育った。
中野はこれまで、PCBの分析
や処理技術の研究開発などに40
年近くの研究者人生をささげて
きた。

もう死んでいる…

「研修で来日したセルビアの
研究者から、紛争の遺産のこと
を聞き、居ても立ってもいられ
なかった」と言う。セルビアと
の共同研究の可能性を探ろう

紛争が影「有毒の遺産」

セルビア・ボル銅鉱山の近くの川。流れ込んだ汚水の影響で水も川辺の土も黄色く染
まっていた。(左から)竹峰、ベスコスキー、中野の3人が川辺に腰を下ろし、今後
の研究計画などを話し合い始めた (共同)



ワインで乾杯する夫婦。市内には川を眺めながら食事を
楽しむレストランが数多い=ベオグラード(共同)



と、後輩の兵庫県環境研究セン
ターの竹峰秀祐(31)を伴ってセ
ルビアを訪れ、ドナウ川周辺の
視察や試験的なサンプリングな
どを行った。

セルビア政府も共同研究の実
施には前向きだ。国際協力機構
(JICA)と科学技術振興機
構が共同で行う国際科学技術協
力プログラムの支援を得て、汚
染実態を解明することを目指し
ている。

10月半ばのある日、ベオグラ
ードの南東約150キロのボル銅
鉱山周辺の川で調査を続ける3
人の研究者の姿があった。
ドナウ川から離れてはいる
が、ここも爆撃で破壊された汚
染のホットスポットの一つだ。
内戦終結後、銅鉱山は再建され
て大規模な採掘が今も続いて
いる。

「この川はもう死んでしまっ
ている」。鉱山からの廃水で
毒々しい黄色に濁った川と、生
活排水などで汚れた真っ黒な水
が流れる川とが出合う場所に立
った中野が言う。黄色い汚泥は
川岸にも積み重なり、水中には
魚の姿はおろか、水草さえない。

「これだけ流れが速く水量も
多いのに、水も泥も真っ黒だ。
どれだけ汚染が激しいか分かる
な」と畳み掛ける竹峰。ベスコ
スキーは「この川もやがてドナ
ウに行き着く。川を汚し続ける
ことはできないのだが、われわ
れには資金もないし、分析機器
さえも十分じゃない」と嘆く。

汚染の実態が解明され、対策
が進む時が来ることを夢見る日
が続く。(文・井田徹治、写真
・植田剛史、敬称略)



取材メモ

地球規模での汚染今も

ポリ塩化レフエニール(PCB)は19世紀に初めて人工的
に合成された有機塩素化合物
だ。絶縁性に優れ、燃えにく
いなどの特性が注目され、ト
ランスなどの電気機器の絶縁

油や塗料、ノーカーボン紙の溶
剤などとして多くの国で使わ
れた。
その後、発がん性などが確認
され、環境中で分解されにく
い上に生物の体内に蓄積しや

すいことから深刻な環境汚染
や人体汚染が発覚。揮発した
PCBが気流によって運ばれ
るなどして、汚染は地球規模で
進む。
1968年にはPCBが植物

油に誤って混入、西日本を中心
に大きな健康被害をもたらした
「カネミ油症事件」も起きた。
日本ではPCBの生産と使用が
72年に禁止されたが、機器の中
に残ったPCBの処理が進まな
いこともあり、環境汚染は現在
も続いている。

原則、毎月第1、第3日曜日に掲載します。